

文化差研の差異に関する研究部会報告 (51)

第五十一回セッション

八路軍に八年間

講師 戸 梶 広

とき 平成二(一九九〇)年五月七日

ところ 赤坂ホワイトハウスビル会議室

司会(中島洋) 本日は戸梶さんから、中国共産軍の医療部隊に八年間おられた、第二次大戦直後の、当時、国共内戦の行われていた頃のお話をお伺いしたいと思います。

いまお手元に差し上げました地図が、主として戸梶さんのおられたところを示しております、真ん中辺に承德というところがございますが、この承德

を中心として南のほうに拡がった辺りにおられ、最後に、承德のずっと東のほうにある北票ペイトウにおられました。

戸梶さんは現在は北海道の網走市に住んでいらっしゃるんですが、今回は山口県へいらして、お帰りに東京に寄っていただきました。戸梶さん、どうもありがとうございます。よろしくお願いたします。

戸梶 ご紹介にあずかりました戸梶でございます。

実は最初に中島先生からお話がありました時に、大した内容のお話もありませんので、お断りしたんですけれども、「いや、もう気楽な気分です話してくれ」ということで、ちょうど山口

県に弟の法事がございまして、その帰り道にお寄りして、何ほどのご参考に

なるかどうかわかりませんが、ひとつ座興のつもりでお聞きいただければ幸いだと思っております。よろしくお願いたします。

八路軍に入って

負けた理由を調べたかった

いまから二十年ぐらい前じゃないか

と思います。大きな地震がありました。唐山^{たんざん}というところがありますが、この唐山で軍属として終戦を迎えましたが、それまで私たちはもちろん情報不足なものですから、幸か不幸かわかりませんが、負けた戦というのは知らなかったんです。そのために太平洋でもって日本が惨敗をしているということ聞きましても、日本軍が負けるというような想像はついてなかったわけです。

それで突然、八月十五日、天皇のご詔勅があるというので、なんのことだろうかといいことで、ラジオの前で、直立不動で聞いておりましたけれども、ただガーガー言うだけでさっぱりわからない。

それで、なんだろうなと思って、帰ってしばらくしますと、部隊本部から全面降服という話を聞きまして、がっくりして、半日ぐらい布団の中にもぐって、備前長船の名刀を抱えて、泣いていました。

そして一カ月近く唐山でブラブラしておりましたが、どうも日本が負けた気がしない。

あの頃は私たちの戦った相手というのが八路軍でしたが、八路軍を見ましても兵器その他も実に劣悪なものですから、負けた感じがしないわけです。そして、よいしこうなったら、どうせこれで一ぺん人生は終わった、負けたら負けたでしょうがないから、八路軍

の中に入って、少し調べてみようかというふうな気になりました。

隣の部隊に知り合いの通訳がおりまして、朝鮮の方ですけれども。八路軍に入りたければいいけれども、どうやって入りたいだろうかと言ったら、「おお、俺が紹介してやる」とって、「あんた八路軍知っているのか」と聞いて、びっくりしました。一年半前から八路軍の諜報員をやっていた(笑)。驚きましたよ、彼は部隊本部の通訳なんです。

もうびっくりしたけど、いままらどいうしようもない。「本当に入れるのか」と言ったら、「ああ、入れるぞ」と言う。「その代わり、なんかみやげ持って行けや」と、「みやげってなんだ」と言ったら、「拳銃一丁ぐらい持って行けや」ということになりました、中隊にあった拳銃を一つ失敬しまして、そして便衣に着替えました。

これは余談ですけれども、唐山には、当時、国民党軍とアメリカ軍が入っておりまして、アメリカ軍というのは日本人の軍刀を非常に嫌うんですね。沖繩でもって斬り込み隊でかなり苦労したらしいんですね。私たちは終戦後したので、ちょっと柄に手を掛けますと、パッと逃げますから、こちらがそれでびっくりするほどでした。

それで八路軍地区に行くには、検問がずーっとありまして、国民党が銃剣

つきで警備しているわけです。ここをどうやって突破すればいいのかなと思たら、「知らん顔して、中国人の顔をして入れ」というわけで、捕まれば捕まった時だわいと思って、それで入って行きまして、無事に入れました。

そして八路軍に行つて、一応簡単な調べを受けたけれども、比較的歓迎してくれるわけなんです、日本人を。

農民に謙虚だった八路軍

玉田というところがあるんですけども、これは地図に出ておりませんが、ここは日本人解放連盟とかいうのがありまして、まず、そこへ入れられたわけです。そこで「お前、中国語がわかるんだから、みんなに中国語を教えてくれ」と言われました。三十名余りの日本人がおりまして、八路軍の教育を受けておりました。

ところが、八路軍の別な部隊で日本人の兵隊さんが三人おる。砲兵隊の方です。日本の野砲を一門持っておって、その操作なんかの教育をしているんだけれども、全然、中国語がわからんから、お前行って通訳でもしてくれんかということ、どうせここへ入ったら、もうあなた任せだと思って、そこへ行きました。

そして、そこに三人日本人がおりまして、部隊と一緒にあっちへ移動し、

こっちへ移動しながら、大砲の操作を教えていました。その人たちは実戦にも参加したんだそうです。私は実戦には参加していませんけれども。

中国の昔の諺に、いい鉄では釘をつくらぬ、いい人間は兵隊にならないという諺があるわけなんです。それまで私たちは八路軍と戦争しておりまして、八路軍も国民党も、それから汪精衛(汪兆銘)の自衛軍も、どうせ兵隊はそんなもんだらうという考えで入って行つたんですけれども、八路軍に入つて感心したのは、規律が非常に正しいということ。そして特に農民に対しては非常に謙虚でした。

各部隊の移動と一緒にあっちの部落、こっちの部落と移動するんですけども、私たちが日本軍と一緒におりました時には、作戦なんかで部落に入りますと、鶏でも野菜でも、あるものは黙って頂戴して食べたものなんです。ところが八路軍には全然それがありません。

私たちが八路軍に入つてからは粟飯とコウリヤン(高粱)、それから白菜の塩汁だけなもので、その当時は、もう全然、肉気も何もないわけです。

それで、ある部落に八路軍と一緒に入って行きまして、駐屯しますね、そこに、日本で言うところの長持というのかね、壁の横に大きな衣類箱が置いてあるんです。その上に玉子が五つ六つ

皿の上に乗っかっていて、私は食べたくてウズウズしていたんです。とにかく食事が悪いものですから。ところが、八路軍は全然手をつけません。

昔は、中国の家屋の中に入りますと、部屋の中に衣類箱、日本流で言うところと長持みたいなものがありまして、衣類が入っております。日本軍は、その中からいいものを持ってきて、ほかの部落に行きって売ったりなんかして、小遣い稼ぎをしておりますが、八路軍は全然そういうものにも手をつけませんし、白菜一つでも絶対手をつけません。それはもうびっくりしました。

それからもう一つ驚いたのは、いわゆる援農ですね。ちょっと手が空いていますと、農家のお手伝いをするわけです。それで農家の方がいつも非常になついてくるわけなんです。非常に協力的なんです。ああ、なるほどこれで日本が勝てなかったのだなと思えました。

蒋介石が日本軍に対して、日本軍が占領しているのは点と線だけだと言っていましたけれども、実際に見てみると、線も取っていません。点だけだったんですね。

例えば、ここに日本軍の本部があり、こっちに中隊があり小隊があるとすると、線にもなっていない。ただ単なる点を日本軍が押えておったというだけにしか過ぎなかったわけです。その

付近の農村というのは、全部八路軍についていたわけです。これは終戦直後ですから、おそらく日本の占領時代も、大概同じようなシステムできていたと思います。これは私もびっくりしました。その当時は中国人の文盲率というのは八〇%から八五%と言われておりましたけれども、だから難しいことを言ったところで到底わからないわけなんです。

ただ、農民が一番関心を持っていることは、蒋介石政権から汪精衛政権、やれ日本の占領時代と、いろいろな時代を経てあの人たちは耐えてきているんで、難しいことはわからないが、時の政権がわれわれにどういう生活を与えてくれるかということが一番の問題であった。

それによってどちらに自分がつくかということなんだろうと思います。

合理的な米票の発行

そうしてもう一つ、これはあとの話になりますけれども、国民党と八路軍が入り乱れた中を、私たちはグルグル回って歩いたんですけれども、八路軍は入った部落、入った部落で略奪は全然しませんので、どういう方法で食糧などを調達しているのかなと思ってよく見ましたら、八路軍の中にちゃんと行政機関が別にあるわけなんです。

行政機関と言ったって移動しているものですから、極めてお粗末なんですけれども、各部落に税金が初めから課されて、それが粟の計算でされているわけです。

そして、その行政機関から米票米票というんですけれども、中国では粟を小米小米と言いますが、その小を省略しまして、米の票で米票というのを発行しているわけです。その米票によって進駐軍なり、病院なりが換算して発行して、それ以外のものは絶対に手をつけないということだったんです。

白菜にしろ、たまに肉やなんかの配給もありますけれども、それらもみんな米票に換算して、米票を村の幹部に与えて、それを税金と相殺するようにしてあるわけです。実に上手にできていますし、これは国民党が、もちろん入り乱れているけれども、国民党はそんなことはしてなかったと思います。これは八路軍の特色ですね。

突然、病院勤務に

半年ぐらいいみんなと一緒に歩きました、その八路軍部隊が受け持っている勢力範囲は大体平定したものですから、そして大砲の操作も覚えたというので、その三人の日本人はその部隊では必要でなくなったわけです。

もちろんその人たちが必要でなければ

ば、ぼくも必要でなくなったわけなんです。それで、ここではもう用がなくなったが、お前たちなんか技術があるかって聞かれました、それで弱っちゃったんです。私は技術なんていうものは全然ない。ところが言葉のやりとりの偶然というのか、私が、軍隊の時に中国人に予防注射をする手伝いをしてきたことがあるけれども、ほかは何も知らないと言ったら、お前、予防注射をしていたのかと。いや、予防注射の手伝いだよと言った。そうしたらお前は病院に行けと言われた(笑)。

びっくりしましたね。私は病院なんというの縁もゆかりもないでしょう。病院に行き、ともかくおまんま食べさせてくれるならしょうがないと思いついて、どうせ病院へ行ったらって雑役でもさせられるのが精一杯だろうと思いついて、それで承徳へ行ったらわけですね。承徳に入ったのが一九四六年の春です。

そこで病院に行きましたら、錦州の鉄道病院というのがございましたが、その鉄道病院の日本人の先生方と看護婦、先生が七人か八人と看護婦さんが六十人ぐらい、がさっと一緒に連れてこられておったわけなんです、その病院に。

司会 承徳にも満鉄の病院がありましたね。

戸梶 ございましたけれども、その病院の方たちは日本へ引き揚げていた。

司会 その満鉄病院を使ったわけですか。

戸梶 いえ、病院は省立病院というのがかなり痛んでおりましたので、それを修築いたしましたして、使っていました。

そこに錦州の満鉄病院の先生方が連れてこられていたわけですね。そのうちの看護婦さん四十人以上はまた分けられまして、別の部隊へずーっと何人かずつ配属されたわけなんです。それで私は幸い、承德の病院に残されました、日本人の先生方と一緒に仕事をすることになりました。

その病院に、ただいまも福岡県でお医者さんをしてられる伊藤幸雄先生という院長先生がいらっしやって、その方に非常に可愛がられまして、そして手取り足取り、速成の医者になるまでさせられた、させられたというか、していただいたわけなんです。それで初め診断学から病理学からポチポチと、いきなり診断学を始めて、病理のほうはあとからついてくるという状態でしたが。

ところが、日本人のお医者さんはもちろん専門家ですから別ですけれども、中国側のお医者さんというのは、言葉は悪いですけども、大変お粗末なわけですね。

私は初めは看護婦さんとお医者さん

の合いの子みたいな仕事をしておりましたが、伊藤先生に可愛がっていただきましたので、だんだんお医者さんの代理をするようになりました。

そこへ中共軍、国府軍、それからアメリカ軍との三者合同の軍事調査団というのが入ってまいりまして、そしてそこで治安状況とか、いろいろ調査するといので、病院にもきまして、調べて行きました。

その間は、救援物資もいただいたりなんかして大変生活は楽だったんです。ところが国府軍とアメリカ軍の調査団がどういことか、理由はわかりませんが、引き揚げたわけなんです。おそらくは、あとで考えますと、国民党軍が進攻を計画していたんだろうと思えます。

興隆へ移動

それで合同調査団が引き揚げて間もなく、国民党軍が攻めてくるということで、すぐにお前たちは撤収せよという命令が病院にきたわけです。それで患者をそこにほったらかしておいて、その当時は負傷兵ではありませんでしたから、一般の市民の患者でしたから、それをおいて自分たちは興隆のほう(西南の方向)へずーっと移動したわけなんです。

そこにはもともと国民党がおったわ

けです。日本軍はもちろんおりましたけれども、日本軍は敗戦になりました。そのあと国民党が入って、その国民党のあとへまた八路軍が攻め込んで入りまして、そしてそこで私たちは民衆病院を開いたわけなんです。

S牧師の悲劇

それでここで一つ悲しいお話をせなにかんことになるわけですけども、ここに仮にSさんと申しておきますが、S牧師さんがいらっしやいました。この方は日本の神学校を出て、昭和十七年ですか、奥さんと子供さんを連れて、その当時七人と言いましたね、神学校出身の方が承德を中心にして各部落へ教会をつくって布教に努めておられたわけなんです。

そして興隆に昭和十七年にSさんという牧師さん夫妻がこられまして、そしてそこで布教をして、布教の傍ら大量の医薬品を買ってまして治療をしていたわけなんです。それでその部落の方、農家の方に、非常に信用を高めおったわけです。その人が昭和二十年の五月ですか、召集を受けたわけです。

そして八月に終戦になりました、承德の離宮のほうに部隊全部が收容されておった。その時、牧師さんの家族はまだ興隆におったわけなんです。それでどうしても興隆に行きたいというの

で、部隊長にお話をして暗黙の了解を得て塀を乗り越えて、殺されても知らないよと部隊長に言われたのに、もうそれは覚悟の前だといふんで逃げ出したわけですね。

そしてどうやらこうやら興隆に着いたわけです。そして興隆でやはり布教を始めたいんですけども、今度はまた国民党が攻め込んできて、八路軍が興隆を撤退しなきゃいかんことになった。その時に八路軍からS牧師さんに、われわれの部隊に来て仕事をしてもらいたいと、いわゆる治療技術ですね、お医者さんの代わりです。

それをしてもらいたいといふって招請をしたんですけども、牧師さんは頑として聞かなかったわけです。それでいよいよ撤退するとなったら、今度は招請ではなく命令が出たんです、牧師さんにですね。それで八路軍がぐるぐると取り巻く。牧師さんは奥さんと一緒に祈りしたそうです。銃を突きつけられながら、その場で三十分ぐらい。これは、現在でも生存されておられます。牧師さんの奥さんの回顧談に書いてあったのを読んだのですけれども、三十分ぐらい祈りして、そして否応なしに連れて行かれたんです。

あとでその部隊におりました私たちの知っているお医者さんから、われわれのところへ通信文がきまして、その通信文によりますと、その後、S牧師

さんは八路軍の言うことを頑として聞かなかった。自分はもちろん国民党にも属さないし、八路軍にも属するのはいやだ、興隆に帰るんだ、骨は興隆に埋めるんだと、頑として言うことを聞かなかったんで、到頭最後に悲しい結果を招くことになりました。

それで、私、その時思い出しましたのは、まだ東京におりました時分に読んだ雑誌の中で、こういう記事がありました、雑誌の名前は忘れましたが、でも、一九三一年に毛沢東が江西省の瑞金で中華ソビエト共和国というのを設立しました時に、政治綱領を發表して、その政治綱領について、その付近か、どの辺りか私はわかりませんけれども、二十四人の外国人の牧師さんが集まりました、その政治綱領を検討したそうです。そして二十四人のうち二十一人がその政治綱領に賛成したというんですね。そういう事態があるわけです。

まあ、もう一つ別の話になりましたら、ナイチンゲールがクリミア戦線でもって医療隊を組織して前線に出て、敵味方なく負傷兵を収容して治療したという話も聞いておりますが、なぜこのS牧師さんがそこまで頑なな心にならなさいけなかったのかなと、いまだにわかりません。

私はクリスチャンの友達が大阪に、私の一番の友達がおりますけれども、

その方はS牧師さんに五分間ぐらい会ったことがあるんだそうです。それで、この間も電話しまして、どうして宗教家というのはそういうふうな頑ななことになるのか、私は凡俗の徒だからそういう心境は全然わからないがと言ったら、その友達のクリスチャンは神の御心に従ったんでしようということでしたけれども。

もし、そういう心境で八路軍の言うことも、頑なに頑強に拒否するような態度が、もしも錦州の鉄道病院の先生方、あるいは従業員、看護婦さんたちに、そういう精神があったならば、一体どうなつたらうかなというふうに考えておりました。

興隆から大平寨に移動

それで一九四七年の九月頃に興隆を出まして、今度は大平寨というのがございまして、大平寨に車で着くまでには、あちらの部落に三日、こちらの部落へ十日と野営するんですけれども、いわゆる野戦病院なんですから、そこで医者や養成するという趣旨だったんでしようが、医科大学第四分校というものを開設したんです。

しかし、それはほとんど名目で、日本の先生方は教科書を大変熱心に執筆されました。ですけれども、ぼくにも「お前も一緒になつて勉強せいや」と

言うから、ハイハイと言って一緒になつてやりましたけれども、正式に教育を受けたという期間はほとんどないですね。

時々ちょっと部落で落着きますと、大きな家へ入りまして、講義を受けるんですけれども、日本人の先生は中国語があまりできませんでしたので、私が通訳をしたりしてやっておりました。

大平寨へまいりまして、しばらくするとまた民衆病院というものを開きまして、そして一般の民衆を治療したり、付近に戦闘がありますと負傷兵が出てきますので、われわれのような医者ですぐ派遣されました、そこでもって治療するわけなんです。

悲惨な地主の清算

この大平寨で私は大変なものを、まあ、日本人の方じゃめつたに見ないものを見まして、ちょっと差支えがありましたら、ここで聞き流しをいたしたいことがあります、いわゆる地主の清算運動というのを見ました。

毎日法螺貝みたいなものを吹くんですね。そして鉦を叩くし、初めはなんだか全然わからなかったんです。それであれはなんだと聞いたたら、地主の清算だと言うんで、地主の清算とはなんぞやと思つて、ははあ、地主の土地を皆さん分けて、地主にもお前は随分こんなな持っていたけれども、今度はこ

れだけ持つて一般の農民と一緒になつてやりなさいということだろうと思つたんです。

それでほかの日本人の方は誰も関心を持たなかったのに、あまりブウブウやるんで、私はある日のこと、何をやっているのかと思つて郊外に出てみたんです。そうしましたら、城壁の外の郊外に出ましたら、そこに舞台がつくつてあるわけです。その舞台のまわりを何百人という農民が囲んでいるわけです。真ん中に通路をつくつて、そして舞台。

演説を始めるんだなと思つて黙つて見ておりましたら、いきなり地主が後手に縛られて舞台に引つ張り上げられるんです。そして、横でもつて農民の、いわゆる貧農ですね。貧農が彼らはわれわれのものを搾取して、ある場合はこうだった、これはこうだったといつて始めたわけなんですよ。

このぐらいのことならやむを得んわいと思つて、けれどもそのうちに「お前には土地をこれだけやるから、これだけで生活せい」ということになるだろうと思つたんです。そうしたら農民がワーッとなりましてね、引っぱたけということになったんですよ。みんな棒を持っているんです。

それでもつて、始まつたんです。地主がヨロヨロと舞台から引きずり下ろされて、通路を引つ張られてきた。ま

わりの百姓がみんな彼を叩いて、到頭叩き殺してしまつた。これを毎日やっているんですね。

そして私たちは大平寨の大きな家を宿舎にしておりますが、その家財道具を持ち出すんですわ。あれは貧農の方が皆さんで分けたんだらうと思うんです。ワー、これはえらいことになる。いわゆる社会主義に移行するということとは、こういう大変なことをしなければだんもんかいなと、そう思っております。

他の日本人の方は誰も地主の清算を見てないんですね、聞いてみましたら、誰も関心を持ってなかった。私は野次馬根性なものですから、えらいものを見たなと思いましたが、死んだあとどうしたんだいと言つたら、油をかけて火をつけて焼いた、こうですもんね。

これは別な地主ですが、初めは地主と知りませんでしたけれど、いい体格の盲の年配の親父さんが物貰いしているわけです。着物を見ると乞食にしては比較的整っているんで、中国人に聞いたんですよ。この人、乞食かいと言つたら、うん、地主だと言つたら目をくり抜いたんだと。いやひどいもんだなと思ひました。

別な話ですけれども、私たちの部隊内でも新民運動というのをやりまして、それでみんな過去のことをさらけ出し

て検討するんですけれども、貧農出身の方は検討しただけで済むんですけれども、地主の子弟が可哀相でしたね。やられるんですわ。もう私もこれは大変だと思ひましたね。

ほかの日本人の方は全然そういうものには参加しないんですが、私はなんでか知らんですけれども、中国人並みに扱われまして、中国人と一緒に検討会をさせられました。

お前も過去のことを検討せいということから、ハイと言つて（笑）、とにかく美辞麗句を並べて、うまい具合になんとかかかつかつて、あれも悪かつたこれも悪かつたと言つて検討書を差し出したら、向こうのほうで検討してくれて、うん、なかなかよく検討したと言つて褒めてくれました（笑）。

しかし、地主の子弟は可哀相でしたよ。私の知っている人などは、叩かれましてね、尻のところがべっちゃり腐つてきまして、移動する時はしようがないから、同じ仕事仲間ですから投げて行くわけにはいかなから、担架で担いで連れて行くわけなんです。それは可哀相なものでした。

趙副院長に助けられた

それから私が非常に感謝したことがあります。これは一度『北票会』という会誌にもちよつと載せましたけれど

も、回帰熱から助けてもらつたことです。私たちの移動には、とにかく虱が多いいんです。それでえらい先生といえどもみんな、昼間ちよつと暇がありますと脱いで虱取りを始めるんです。ところがこの虱から回帰熱という病気が発生します。回帰熱になりますと存じかも知れませんが、高熱が出まして下がって、二日ぐらいいおいてまた熱が出て、これを繰り返すわけなんです。

そうすると大体十回以上そのまま放っておきますと、十二、三回過ぎますと身体に免疫体ができて、回帰熱そのものは治りやすけれども、今度は肝臓が完全にやられてしまひまして、最初から治療をしないでおきますと、完全に肝臓をやられます。

回帰熱というのはスピロヘータという細菌が原因でして、俗に言うサルバルサン、66（第六〇六号）が特效薬なんです。ところが66なんていうものは、野戦病院が持つていないわけです。それで、やむを得ずに安静にさして、免疫体ができるまで待つ。

その当時、私たちのいた部落の隣の部落に七、八十人の、回帰熱そのものは治癒したけれども、肝臓が完全にやられてしまった患者がいました。その肝臓疾患が回復するまでには数年かかるんだそうですが、それで時には廃人同様になつてしまふんだと言ふんですね。

日本人で罹つたのは私一人なんです。それで私もあその仲間入りするかと思つてがっかりしてしまつたら、副院長の趙という方がおられまして、その人があなたにサルバルサン一本打つてやると。いや、びっくりしまして、あのかと言つたら、実は全部で三本、幹部用に取つてあるけれども、あなたに一本打つてやるからと言ふんで、打つていただきました。

それで二回か三回の熱を繰り返して治りました。もう熱が出る時は四十度以上になりますので、尾籠な話ですけれども、看護婦さんの目の前で前をまくつてジャージャー小便していたんだそうですよ。全然自分では知らないんですね。治つた後になって、あんな格好の悪いことを言われて。自分では全然憶えていない。そのぐらいい熱なんです。

それでこれとはにかく非常にありがたいなと思ひました。もう手を合わせる思ひでした。

筏で濛河を渡る

それからもう一つ、最後には笑ひ話みたいですが、前線に派遣されました。野戦病院ですから、すぐ前線で戦争しておりますので、負傷兵がどんどん入つてきまして治療しております。したら、それで医者がぼくと中国人が

一人と看護婦さんが五、六人おりまして、そのほかに責任者の政治委員というのがあります。この政治委員というのは各グループには必ずおります。

そしていよいよ国民党が攻めてくるから撤収せよということになりました。それで重傷者は残せよということになったんです。重傷者は残して、医者の方と政治委員と二人だけ残れということになりました。いよいよこれで駄目かなと思いましたが、命令ですから、聞かないわけにもいきませんし、第一、逃げ出したってどこにも行きようもない。軽傷者はもう逃げ出して行きました。

確か竜井関の近辺なんです。それで私と政治委員とで、二人でもって頭を抱えておりました。どうするってしようがない、命令は命令だつて政治委員は言うし、これはじーっと考えておつて、はてな、もし国民党がここへきたらまず、負傷兵はみな殺される、政治委員はもちろん殺される、だけど俺は日本人だと言えばなんとかなるかなというふうな、実に浅ましい考えでしたけれどもね、考えておりました(笑)。

夕方近くになりましたら、トラックがきたんです。トラックで攻めてきやがったと思つて、よく見たら味方なんですわ。空っぽのトラック、それで、お前ら早く乗れというわけで、そ

れに乗りましたら、灤河の岸辺に着きまして、そこに八路军が何百名とおるわけなんですよ。

そして筏が一隻だけありまして、向こうの岸と行ったたりきたりしているわけです。それで兵隊が先だ、負傷兵は後だということになりました。しようがないわいと思つて残つておりましたけれども、兵隊が乗る間に負傷兵を一人か二人ずつ、私が預かつておりましたのは重傷ばかりですから、乗つて向こう岸に送らせたわけです。

そして向こう岸へマグロみたいにダラッと並んでいました。陽が沈みかけて、薄暗くなりかけていました。そして、私はなんであんなったのか知りませんけれども、一番最後の兵隊さんと一緒に、向こうへ着いたら、患者が一人もいないんです。どこへ行ったか全然わからないんです。

兵隊さんは兵隊さんで、各グループで隊を組んで行つてしまつて、その川岸で私一人になったんです。

万里の長城を行つたりきたり

その時は、人民服を着ておりました、人民服の後ろに、普通行軍する時に、薄い布団を八つ折にして背負つて行くんですけれども、その時は綿を抜いていたんです。綿を抜いてがわだけ背負っていたわけです。綿はどっかでもまた補

充できるということでおりました、それで私一人になって、もう夜で真っ暗だったんです。

それで土手を上がつて見たけれども、どこもなんにも見えないんです。その時、雨がショボショボ降つていまして、私が上がった頃には霧雨みたいな雨で、道路がありまして、その道路に水溜まりになってるんです。それで、あそこは水溜まりで道路だわいと思つて、どっかに着くだろうと思つて、しようがない一人でトボトボ歩いて行きました。なら、万里の長城にぶつかりました。

初めは万里の長城ってことがわからなかつたんです。なんだか随分でっかいがっちりした建物だわいと思つて、中に入りますとね、パーンパーンと、下が水なものですから反響するわけです。そうするとなんとなく若い時に見た洋画の古城を思い出して、ああ、あの映画は面白かつたななんて思つて、万里の長城を越えて反対側に出たんです。

ひよつと見たら、ああこれは万里の長城だわいと思つて。そうしたら先に農家がございます、それで灯がついてるんです。それで側に行つてみると、八路军だつたんですね。これはしめたと思つて、すまんけども、一緒に寝せてくれと言つたら、これ見ろや、全然寝られないぞと言つて。三名寝まして、小さい部屋なものですから、

三名でびっしりになっているわけです。

大釜の中で寝た

寝られないから、どっか他を探せと言つて。しようがないから、また出て、万里の長城をまた越えて戻ると、帰りの道の右側にかなりでっかい家が見つかったわけです。油灯(ユードン)というんですけれども、昔で言うところの行灯ですね。あの光が見えるんです。ところが八路军と国民党軍と入り組んでいます。敵だか味方だかわからないんです。しかし、かなりでかい家なんです。

そうして狼のウワンという声は聞こえるし、行くところはないし、じーっとその家を見ていたんです。そうして、そーっと這つて行つて、果して敵だろうか、味方だろうかと思つていた。その家は道路から七、八十メートル離れておりましたんですけれども、中間まできたら明かりが消えちまつたんです。

はてなと思つてね。とにかく黙つて戸の側に行つて聞いてみると、トンリュウという言葉が聞こえたわけです。同志というんですね。はあ、トンリュウというところを見ると、これは八路军だわいと思つて、戸を開けて、すまんけれども、医務隊の者だけれども、一人はぐれちゃつただけだけれども、寝せてくれんかと言つたら、寝ほけ言葉

で寝られない寝られないと言っている。足がぶつかって見ましたら、ズーッと寝ているんですわ。ザッと二十人ぐらいいですね。

それで、もうここ追っ出されたら、どこも行かないと思つて、ひよっと手を掛けたら、大きな竈があります。かなりでかい竈なんですわ。

ご存じでしょうけれども、中国では、街では小さい鍋を使いますけれども、農家に行きますと、大きな竈がありましてね、そこへ五右衛門風呂みたいなきががあります。大きな釜ですね。あれでご飯炊いたり、おかず炊いたりやっちゃう。

その日は夕飯は食べてませんでしよう、歩くだけ歩いて、身体はビショビショで。ひよっと手を掛けたら真っ暗でわからなかったんですけれども、竈なんですよ。それで鍋があるわいと。鍋に食べ物があるかなろうかと思つて、そうしたらなんにもないんですけれども、鍋が熱いんですよ。

そこでひらめいて、蓋を取つて、布団のかわを中へ敷いて、中に入って寝たんですわ。そして蓋を掛けて、それでしみじみと、釜の中で横になったのは、石川五右衛門と俺だけじゃないのかなと思ひましたけれどもね(笑)。ちやうどサウナ風呂みたいなのに、中が熱いでしょう、それで湿った布団を入れたもんだから、ふーっと気持ち良くなっ

てきました。いや、石川五右衛門は熱かったらうなと思つていましたよ。

朝になればどうせみんな、起こしてご飯を炊いて、おこぼれにあずかれるだろうと思つていましたが、疲れてい

たんですわ、すぐ寝まして、朝ひよっと目が醒めて時計を見たら八時頃でした。誰もいないんです。三十人以上の人間がガチャガチャしながら出て行っただから、目が覚めそうなんでもすけれども、全然目が覚めないで寝ていたんですわ(笑)。誰もいないんです。いやあもう、お腹はすく。昨夜も食べてない、今朝も食べてないでまいつてしまつて、ここにおつたつてどうにもならないと思つて、また、万里の長城を越えて、トボトボ何かにぶつかるだろうと思つて歩いて行つたんです。

随分歩いて、やっとわれわれの病院隊にぶつかった。事情を話したら、みんな大笑いでもんね。あれだけはいまでも、全然忘れられませんか。

北票で診療所を開設

それで移動しますと、先生方は馬車、時にはロバに乗りましますけれども、ぼくはなんでか知らないですけれども、中国人並みに扱われまして、もうテクシーです。それで私たちは戦闘部隊でないし、特に日本人もんですからね、口は向こうに預けてあるし、戦争に対す

る責任というものは感じてないもんですから、精神的には極めて気楽なものだったんですわ。

それですから移動すると、あそこは景色が素晴らしくいいんですわ。そこをグルグルしょっちゅう行ったりきたりするもんだから、觀光ルートだと言つて、ここは耶馬溪だとかつてみんなで名前つけたりして移動していました。それで一九四九年に新政府ができて、また承徳にまいりまして、私もいつの間にか医者になつて、お医者さんの扱いを受けて、給料をいただくようになりました。

そうしたら今度は、お前は北票へ行けということになりました、私一人ですわ。何しろ中国人並みですから。四年の秋にまいりまして、診療所を開設したんですけれども、確か、私は宣伝に使われたんだらうと思つて、日本人ですからね、日本人の医者と言えはとにかく技術はいいというように言われておりますので、日本人の医者

がきたということで宣伝に使われたんだらうと思つて。その時は北票の病院としましては私たちの診療所と、それから炭鉱病院ですわ。大きな病院がございますが、炭鉱病院というのがありまして、それで日本人の看護婦さんも三名おりまして、それから炭鉱技師が一人いらつしました。本田さんという方で、それで

すっかり仲良くなりまして、行き来するようにになりましたけれども、ここで少しお話をすることがあります。

効果的な阿片患者教育

診療所におりますと、三、四十人の人が毎朝、鍬を担いで通り過ぎて行つて、そして夕方帰ってくるんです。何をやるのかなと思つて、中国人に、あれは一体なんだろうかと聞いたたら、あれは阿片中毒患者を教育しているんだと。いわゆる禁煙運動の一環としてあれをやっているんだ、要するに強制労働によつて禁煙させるんだということでした。あれは感心しました。

前もやはり私たちが中国におりました時代には禁煙運動をやるんですけれども、県長あたりが町に行つて演説します。阿片は毒で人類を滅ぼすとかどうとかこうとか言つて演説して、そして帰つてくると、やれ疲れたと言つて一服(笑)、吸うんですわ、阿片を。なんの効果もないんです、あれは。だけれどこの八路军のはとにかく徹底していましたね。

それからもう一つ、賭博がいけないというんですわ。それでも内密にマージャンをやる人がおりまして、そうするとそれを掴まえてくるでしょう。そうしますと、私はマージャンをやりましたというゼッケンをつけまして、町

掃除です。箒を持って町掃除をやらされるんです。

ですけれども、現在は、マージャンは大変盛んだそうです。網走に二人学生、研修生が来ておりますけれども、話を聞いてみましたら、いや、今はマージャンは大変盛んですって、金賭けているのかってきいたら、賭けている賭けてるって。盛んだそうですね。ほかにあまり楽しみがないもんですから、やっているようです。

それからもう一つ、感心しましたのは、識字運動といまして、文盲率が大変高かったもんですから、それでお年寄りとか、それから若い方でもみんな一堂に集めて、それで先生が字を教えていました。

それでお年寄りなどは講堂での授業が終わりますと外に出まして、グループになって歌でも歌うような調子でもって読むんです。黙って見てみたら、本当に単純な、なんといいですか、幼稚園の少し毛の生えたような教科書でやっているわけなんです。それでもとにかくやっているんだから、偉いなと思いました。

朝鮮戦争とハエ退治

これも北票会の会誌に出しましたけれども、朝鮮戦争が勃発しまして、私たちのところへ身体検査をしにきまし

て、身体検査をパスしますと朝鮮へ行って行かれるわけですよ。持って行かれるという言葉はいいか悪いかは別としまして、送られるわけです。

そして、頑丈な身体で病気なんか全然ない人は、健康体ということで診断しますとみな前線に行きました。それで半年か一年か過ぎまして、ぼったり町でもって、松葉杖をついた青年に、先生って言われて誰だろうかと言ったら、いや、先生の身体検査を受けて、われわれの部落から五人行きましたけれども、四人死にました。私は負傷したお陰でこうやって帰ってこれましたと、そう言っていました。ああ、前の日本もなあと思って、暗然とした気持ちになりました。

それから最後になりましたけれども、ハエの話します。これは一九五一年の三月二十日過ぎですけれども、県庁からいきなり電話が入りまして、駅にハエが出たというわけです。北票の三月下旬というのは、まだ寒くて全然ハエなんか出る時期じゃないんですよ。もちろんどこにもおりません。

それでハエが出たというわけで、そのあとということが、これはアメリカ軍の朝鮮における細菌戦術の流れがここに来たんだと。こういうことを言い始めたわけです。それで直ちに駅に出勤してハエ退治せよということになった。うちの病院はちょうど患者さんが多

いんで行かなかったんですけれども、一般の方は駅へ行ったらしいです。ハエがおったかおらんか知りませんけれども、実際問題としてハエが朝鮮から飛んでこれるんですかね(笑)。

それにもう一つは、例えば虱にしろ、蚊にしろ、専門用語は私はもう忘れたんですけれども、細菌を溜めておく袋と言っているのか、なんと言うのかあるんです。しかしハエにはそれが無いと言っています。

ただ、飛んで行く時に、汚物を足に付けたのが、あっちこちつけて歩くから、それで悪い病気を伝播するんだというふうに言われておったんですけれども、とにかくアメリカ軍が細菌戦術を始めたハエがここまで飛んできたんだから、なんでもかんでも撲滅せよという命令でして、それからが大変なんですわ。

とにかく一家に一人動員しまして、あの北票の町で、家の中も、トイレでも、全部ほじくりまわして、ハエの卵を撲滅せよということなんです。卵なんていうのは見えるわけがないでしょう。それで私たちが往診に町に行きますと、木材が置いてありますと、丸太の上でお年寄りがなんだかほじくっているんですよ。あんたら何しているんだって言ったたら、ハエの毒を取り出しているんだって、こうですよ。驚いたもんです。

そして一体どっからそんな無茶苦茶な指令が出るのかなと思いましたが、でも、とにかくわれわれのところには県庁から電話がきたけれども、おそろく県庁へはどっか上のほうからきているんだと思います。どうしてそういう無茶苦茶なものが出るのかな、それでもってハエなんかを撲滅できるわけないだろうと私たちは考えておりました。

ハエがいなくなり

子供の急性大腸炎が激減

診療所は十二時から二時までお休みで、夏ですとわれわれは上半身裸になって、ガーツと寝るんですわ。ところがハエがおって、それまでは上にほうふ(袍布)をかけなかったら寝られなかったんです。ところが、その年は、ハエが出る時期になりました。ハエが全然いないんです。出てこないんです。これにはびっくりしました。そして食堂へ行きますともハエがいらない。

昔から中国では料理屋に行きますと、ハエがたかるんです。ちょっと高級な料理屋へ行きますと、お坊さんの持っている馬の尻尾みたいなのがございませぬ(扨子ーほっす)、あれで上でもって払ってくれるんです。そのすきを見て食べるんですけれども(笑)。往診に行きましてもハエがたかって、診断にも邪魔くさいんです。まあ、本当に

ハエはいやなものです。それがいなくなりました。

もう一つ大変重要なことは、毎年五月のメーデーがございませうが、メーデーの頃になりますと、必ず小さい子供の急性大腸炎というのが流行してくるんです。そしてあの中国の急性大腸炎はちょうど日本でいうと疫痢のような症状で、放っておきますと数時間で死亡する例がたくさんあるわけです。

五月のメーデー前後からダートと患者が増えてくるわけです。ところがその年は患者がこないんです。これはびっくりしたというより初めは原因がわからなかった。なんで今年には患者がこないのか。毎年五月の初め近くになりますと、子供の患者が増えてくるぞと言っ

て用意するんです。まず第一番に流腸しまして、強心剤を打って、それからサルファ剤やなんかを与えるんですけども、それを準備して待っていませんけれども、患者が全然こないんですね。不思議だな、今年はどういうことだろうかいなと思ひまして。それで私の記憶にはっきり覚えているのは、第一号が来たのが、七月の二日だったか三日なんです。それでもポチラポチラしかきません。いつものようにドーッとくるということじゃないわけです。それでは変だなと思ひながら、これは今年の特別な現象かなと思ひましたが、翌年もその翌年も同じです。そ

れで私は知り合いの漢方医に、一体これどうなったんだろなあって、以前はこういう状態だったけどもって言うたら、それはハエがいなくなりましたからだよと言う。

言われてみれば、なるほどそうだわいと思ひましたが、しかし、効果は実に大きかったですね。

それにしてもハエのばい菌を取るんだというあの作業は、大変な作業でしたよ。食堂なんかアンペラが張ってありますけれどもね、壁でも天井でも全部はがして水洗いしまして打ち直したんです。食堂に行つたって、ハエ一匹おりません。あれだけはただただとにかく感心させられましたね。

それで私、その後、一九七四年から毎年中国に行つておりますけれども、やはり今でもハエはあまりいないですね。あの当時の影響なんだろうか、それとも毎年そういう運動をやっているのかな、どちらなんだろうかなと思ひておりますけれども、大変なものですね。日本ならさしずめ薬品でもってやるんではないけれども、向こうはもう人海戦術です。

司会 さて、それで奥様とは北票時代にお会いになったんですね。

戸梶 そうです(笑)。

司会 その辺もちょっとお話を。

戸梶 北票の綿花公司という綿の加工公司に日本人の方がいらしたんです。その方が錦州に転勤になりました、ここにこういう男がおられるけれどもというお話から……

司会 奥さんのほうは錦州にいらしたんですか。

戸梶 そうです。ちょうど私が鼻を悪くしまして、錦州で手術したわけですよ。それで見合ひみたいな格好になりました、なんとなく一緒になるような格好になりました。

帰国に際して

県長が餞別を集めてくれた

司会 それで最後は北票から引き揚げていらしたんですね。

戸梶 はい、そうです。雑誌『諸君』の四月号で、第四野戦軍におられた荒井勤さんという方の記事を読ませていただきましたけれども、あの方は、なかなか帰りに退職金をいたいて帰ったというふうを書いてありましたけれども、私なんかは退職金なんかは何もないですよ。

それで、帰る動機をお話申し上げますと、実は私、初めは帰るつもりはなかったんです。

内山完造さんらが中国政府と交渉しまして、日本人がおるのを引き揚げさ

してくれということで、協定ができました引き揚げるようになりましてけれども、私たち、あそこでわりあい生活も楽ですし、二人とも仕事をしておりますし、日本に帰つたって、何をしたいかわかりませんし、それよりもここにおつたほうがいいと思ひまして、帰るといふ気は全然なかったんです。

ところがですね、反革命鎮圧運動というんですかね、なんか運動がございましてね、昔のいわゆる旧悪をほじくり出して、責め出したわけなんです。そして私たちのほうは、お互いに検

討会を開いてどうやらこうやら収まったんですけれども、町の人間が、終戦後は悪いことはなにもしないんですが、ただ、かつて要するに日本と協力したとか、あるいは不当な利益を得たとか、そういう理由で六人が処刑されました。

それで背中に罪状を書いたゼッケン付けられて、馬車で町を引き回して、川原に連れて行って、私ついて行つたんです。一体、本当にやるのかいなと思ひましてね。そしてついて行きましたら、川原に並べましてね、そしてやつたんですわ。

それを見て急に、おれも軍隊におつた時、考えてみても、あまり悪いことはしてないはずなんだけど、地主の清算運動でも、いわゆる人民裁判というもの、ちよいちよい見ましたけれども、釈明とか、弁明というものは一切

聞き入れませんですからね。とにかく片っ方がこうだこうだとすると、それで罪状が決まってしまう。

それで私もなんかの運動でそういうことになって、お前は軍隊の時にこうだろうああだろうとやられたら、最後はこういう運命になるんじゃないかなろうかと。それで急に帰りたくなりましてね、それで帰る気になりました。

それで県庁に今は市庁（中国では県より市が上位）でしようけれども、その当時は県ですけれども、県庁に行つて、その委員長に話をして「帰国する」と言ったら、お前なんで帰らないかんのだって、随分引き止められましたけれども、いや、日本には親父がいて、年を取つてもう動けないで、俺が行かなきゃ食べていかれないんだって言って、なんとかかんとか理屈をつけました。

中国は大変お年寄りを大事にする習慣がありますので、そうかと言って、許可してくれまして、県長のところに挨拶に行きましたら、県長が「お前、金持っているか」と言うから、「金なんかあるわけないでしょう。貰っただけ食つたり飲んだりして」って、言ったら、そうかそれは気の毒だと言って、県長が餞別というんですか、寄付というんですか、集めてくれました。いや、これはありがたかったですね。それで秦皇島に行きまして、日本円

に替えてみたら、十何万円かありましたんで、これで日本へ帰つて大分食いつないだわけなんですけれども、本当に感謝に堪えませんでした。そういうことでございまして、さほどご参考にもなりませんでしょうけれども、一応、これでお話を終らせていただきます。

司会 皆さんいろいろご質問があると思います。どなたからでもどうぞ。

質問 終戦後、八路軍に参加する決意をされたという話だったんですけれども、他の日本人でも八路軍について行った人はたくさんいたんですか。

戸梶 いや、私のところでは私一人です。私は軍属ですけれども、軍属で退職させてもらいまして、そして参加をしたもので、ほかの兵隊さんでは全然いませんでした。しかし、日本人の解放連盟には、玉田というところですけども、そこには三十何名か日本人がおりました。各所から寄り集まりですから、警察の方もいらっしゃったし、兵隊さんもおりました。

質問 実際に、国民党軍と八路軍の考え方の差みたいなのはお感じになりましたか？

戸梶 これは感じました。最初に申し上げましたんですけれども、八路軍は農民出身ですわね。そして教育程度も

非常に低いんですけれども、とにかくわれわれが土地を持つんだ、われわれがとにかく解放されるんだと言う。難しい社会主義理論とか共産主義理論とかいったものはわからないんですけれども、こういうふうな生活になるんだよという、悪い言葉で言いますと、バカの一つ覚えというような考え方なんですわね。

そして教育が徹底しております。朝晩国歌を歌わして、共産党万歳、八路軍万歳でもって教育しておりますね、それだけは徹底しておりました。ちょうど日本人の特攻隊精神と同じように感じられました。自分を犠牲にしてでも、国家と党のために尽くすんだという考え方だったんですわね。

質問 八路軍に参加された時に、日本人のグループの中に組織みたいなものはつくられたわけですか。

戸梶 それは解放連盟に入りまして、その時の指導員というのは、延安で教育を受けた日本人です。その人たちはズーッと散らばって、私たちの場合も中西さんという方がおりまして、そしてわれわれに教育をしていたんです。

質問 日本人解放連盟というのはずっと後まで存在していたんですか。

戸梶 それは私が離れてからはわかりません。私が第一回目に承徳に入つて

少しして、その人たちは承徳を通りまして歩いて帰りました。日本へ引き揚げました。その人たちが日本にきて、いろいろ活動されたんじゃないでしょうか。

質問 一九五二年、五三年の反革命鎮圧騒動の時に、帰国された日本人はたくさんいるんじゃないですか、反革命鎮圧騒動を理由として。

戸梶 私たちの病院に限りましては、日本人にまでそういう運動はあまり及ぼされないんです。いわゆるなんといえますか、比較的にお客様扱いだったんです。

三反運動とか、五反運動とか、いろいろな運動では、私は中国人と同じ扱いを受けまして、一緒になってやらされたんですけれども。

質問 中国人と同じ扱いを受けたということは、一面においてはそれだけ信用されていたということなんじゃないですか。

戸梶 どういうことなんでしょうかね。とにかく、前線で負傷兵が出ますね、どこの野戦病院だというと、おお、お前行ってこいと言われて、行かされるわけですよ（笑）。なんでこういうことになったのか、まあ、一つには若かったせいもありますね。もう日本人の先生はご年配の方が多くございましたから

ね。それに言葉もあまりわからなかった。それでも各部隊に、完全に別な部隊ですけれども、日本人の先生方がボンボンとおられましたよ。

質問 八路軍に参加した日本人の中で、中国共産党に加入した人というのは見聞されたこととおありですか。

戸梶 共産党に加入した日本人というのは、解放連盟に入った人はわかりませんけれども、延安から来た人はもちろん共産党ですから別ですけれども、他では私どものグループでは看護婦さんで何人かおりましたね。

質問 それで戦争が終わったあとの待遇ですけれども、いわゆる外国人専門家という扱いになっていたわけですか。

戸梶 ああ、先生方はそうです。そうして手当てですね、これは生アヘンでくるんです(笑)。

司会 それをまた先生方は売るわけですか。

戸梶 先生方は農家の人に売るんです。私はもちろん専門家でないですから貰いませんよ。しかし先生方は貰って、農民に売るんですけれども、農民は黙って買いますが、あれを見るとアヘンというのには中国人の場合は、特殊な人ばかりが吸うわけではなくて、一般的にみんな吸っていたんだなということが

わかりますね。わかりますというのは変ですけれども。

司会 それは中共軍も知っていて、アヘンは非常に換金性があるということですね(笑)。

戸梶 そうなんです。承德に行きました時に、でっかい瓶が、ある門に二つ三つあるんですよ。なんであんな瓶をあんなところに置いたんだと聞くと、あれはアヘンが詰まってるんだって。見させてもらったら、びっしりアヘンが詰まってる。

質問 そのアヘンは、どこからきたアヘンなのですか。

戸梶 どこから集めたのか全然わかりません。

昔の話というとおかしいですけども、お客さんに行きますね。上流のお客さんに行きますと、まず一服となります。昔、坂西利八郎という陸軍中將がおりましたけれども、あの方が「中国人にアヘンを勧められたら、一緒に吸うぐらいな度胸がなきゃ情報は得られんぞ」と言われました。なるほどと思いました。

私たちがお客さんに行きますと、まあ、どうぞ一服って言うんですよ。私も二回吸ったことがありますけれどもね、身体が受け付けないんです。カーツとなるもんですから。そうすると、アヘンの吸えない方はどうぞって言って

マージャンが用意してある(笑)。あれはぼくはできませんので。四隅にお金が置いてあるんです。どうぞ、これでお遊びくださいと。

それでいいところになると女の子がちゃんといっている。東南西北二回、これが普通一般です。どうぞと、八回やりましょうと。それでやる。アヘンが吸われんとこっちのほうで、どっちかですね。私はもっぱらマージャンばかりでした。

質問 軍属としては、何をやっておられたんですか。

戸梶 通訳をやっていました。

質問 最初から通訳を目的として中国におられたんですか。

戸梶 陸軍省の試験を受けて、東京で少し勉強しまして、陸軍省から派遣されて中国に行きましたが、ちょうど大阪の人と一緒にたわけです。大阪の人と二人で二九七二部隊というところに行きまして、そして二人とも藤井部隊に配属になったんです。

藤井部隊は、河北省の商河というところにあつたのですが、商河県に行つて藤井部隊のすぐ横つちに、また藤井部隊の門へ入らない町辻に生首がぶら下がってあつたんです。罪状を書いた生首が。

そして部隊長の前に行って申告して、

二年の誓約書を書かされるわけなんです。私は簡単に書いたんですけども、その大阪の人は頑として書かない。その首を見ただけで震え上がっちゃって、帰ると言ったら帰る、嫌だって言ったら嫌だって言つて。部隊長がなんと言つたつて、到頭誓約書を書かずに帰りました。

それはもうあの頃は激しかったです。一年三百六十五日、五百回ぐらい戦闘がありました。朝晩戦闘に出たこともありますし、幸いと言つていいんでしょうか、私はあまり負け戦というのを知らないんです。

質問 お話の最初のほうで、日本軍は八路軍には負けていないと思つたというふうな言われまされたけれども、その当時の日本人は大抵みんなそう思つていたんですか。

戸梶 私たちの部隊だけになりますけれども、まあ、最高部はわかりませんが、考えられないです。なんともただ、ぼかえつとしました。八月十五日のご詔勅を聞かされた途端に。やっぱ情報不足だったんですけれどもね。

質問 山東半島にいた部隊は終戦の直前かなり八路軍にやられたということも聞いていますか。

戸梶 あの相手は確か朱徳の軍じゃな

かったかな。それから、あの人も大分やられたんです、のちに陸軍大臣をやった最後に戦犯になった板垣征四郎。あの人の師団も、目茶苦茶にやられたんです。

私、不思議に思ったのは八路軍がなぜあれだけ武力を増強し得たかということなんですけれども、汪精衛政権下の軍隊、自衛軍ですね。八路軍は彼らを自衛軍とは言わないんです。送槍隊といいました。槍というのは銃器のことを言うわけですね。鉄砲ですね。鉄砲を送ってくれる隊という別名がついていたんです。

なぜかと言いますと、八路軍はうまいもんですよ。自衛軍に対して、お前たちと戦う気はないんだ、銃器さえ渡せばお前たちは農村の出身なんだから、全部農村に帰してやるからと言って宣伝をするものですから、バチバチ始まったも、すぐ手を挙げてしまおう。

それで銃器は取り上げてしまっても、必ず出身の部落まで行けるようにルートを決めてくれるわけです。そしてさっきお話した米票をくれて、そして、もちろん歩いてですけれども、出身地に帰れるように計らってやっているわけです。

それでやはり日本軍が怒って、自衛軍は日本の指揮下にせよと言いついて、汪精衛と論争になったわけです。

質問 汪精衛の最後が複雑ですね。

戸梶 ええ。Kという特務機関長が、会議の席上、大論争になって、やっちゃったわけですよ。それで急性肝臓疾患という病名をつけて、名古屋の医大に送って手術をしたわけだけれども、間に合わなかったということですね。

質問 中国語にはいろいろ方言がありますね。いらっしゃった時はどんな言葉だったんですか。

戸梶 旧満州は山東用語が多いんですね。山東省の言葉。と言いますのは、山東省からの出稼ぎというんですか、この人たちが多かったものですから、例えばチーチェンというやつをキーティエンといったり、山東訛が非常に多かったですね。上海とか、広東とかに行きまして、生で喋られたら私には全然わかりません。特別な、ちゃんと別な教科書が出ていますからね。

質問 そういう方言は、日本で習っていらっしゃったわけですか。

戸梶 いや、方言は習いません。方言は中国に行かなければとてもできません。ただ満州方面は、北京官話でもほとんど通じます。私は南へ行きますと全然通じないところがあります。

質問 ちょっと細かい話ですが、さっきの米票というのがありましたね。あ

れは例えば単位というか、例えば日本でいうと一円とか、その当時はどういう単位でしたか。

戸梶 米票は向こうは、日本は升でやりますが、向こうは必ず量目は重さですね、何斤何斤といます。ですから粟何斤というふうになっています。

質問 現在も糧票を使いますね。それは米票がずーっと残っていたものというふうに見えていいわけですか。

戸梶 違うんじゃないでしょうか。当時の米票、現在はないと思いますよ。

質問 いまの話に戻りますが、実際に向こうで生活をされていて、実際にそれをお使いになっていたことはあるんですか。

戸梶 私は全然使ったことはありません。何しろ、口は向こうに預けたままなもんですから。

質問 そうすると、現物給与ですか。

戸梶 いえ、私は現物もいたたいておりません。向こうの人たちと一緒に食べて、釜からお粥を、粟のね、ご飯をついで食べるわけですから。そして粟、コウリヤンと白菜の塩煮ばかりですとね、初めは手にひび割れしてきます。酷いものですね。脂肪がなくなりますとね。

それからちょっと落ち着いたところ

になりますと、一週間に一ぺんずつメリケン粉と肉と白菜、葱、これを配給してくれるわけです。それでみんなが集まりまして、ヤアアと言って、餃子をつくって食べるわけです。それで栄養補給をしていました。酷いものですよ。

司会 でも、北票の診療所にいた時はちゃんと給料を貰っていたわけですね。

戸梶 ええ、あの時は給料を貰っていますので、ほとんど食堂契約です。食堂に行って食べていました。

司会 北票の診療所というのは、町の中ですか。

戸梶 ええ、町の中です。それでこの間ご一緒にまいりましたね、あの時はもう二百ベッドの大きな病院に変わっておりましてけれども。

質問 軍隊の食事で、小米と白菜の煮たのが出たという話ですけども、農民の食べているものと、それから八路軍の兵隊の食べているものと比べるとどうでしょう。

戸梶 私は八路軍に加わっている間、農民が食べているのを見たことがないんですよ、実際問題としまして。進駐して野戦病院を開きますね、そうすると、農民の方はどっかへ集合するらし

いんです。いないですよ、私たちの近辺には。どっかへ集合するんですね。それで、生活していたんじゃないかろうかと思えます。

質問 農民を診察なんかされる場合、彼らの手もやはりひび割れしておるんですか。

戸梶 いや、ひび割れしておりませんですよ。日本人だけです。私たちが急に生活が変わって、油っ気がないものですから。

質問 八路軍におられた時の食事で高頭ーウォトウは、よく出ましたか。

戸梶 八路軍の時は高頭は、たまたまは当たりますけれどもね、滅多に当た

りませんですよ。高頭は上等な食べ物ですからね。

質問 粟よりも高頭のほうが上等なんですか。

戸梶 上等のほうですよ、そんなものは滅多にありません(笑)。それから日本人はソバの風味を楽しみますけれども、中国ではソバはもう最低の階層しか食べませんですからね。

質問 胡麻というのはあまりないですか。

戸梶 いえ、胡麻はありますよ。

質問 わりあい常用しますか。さっきの油ということから。

戸梶 中華料理にはもちろん使いますけれどもね。あの時代はほとんど使えませんでした。

質問 朝鮮戦争の話が出ましたですが、朝鮮戦争に対する民衆レベルの態度というのは、どんなものだったのでしょうか。対外的には、あれは義勇軍と称

していたわけですね。北朝鮮が負けて、鴨緑江の近くまで南のほうから一時期攻めて行って、それに対抗して中共側から義勇軍が出てきた。ボランティアと言いますか、そういう形で出てきたということになっていたんですけれども。

戸梶 兵隊のほうは特別に喜んで行っ

たわけではないと思うんですけれどもね。

同じ社会主義政権を樹立するんだという上からの絶対命令がありましたので、それで行ったわけですね。アメリカ軍は近代兵器で、中国側は肉弾戦みたいな格好でぶつかっただけですね。そんなものですから目茶苦茶にやられちゃったわけなんです。それでもいわゆる人海作戦でもって、確保したわけですね。

質問 先ほどの汪精衛の自衛軍に、八路軍がつけた別名は。

戸梶 ソニー送るですね。チャオは木偏に倉と書きます槍、それに軍隊の隊です。

初めは送槍隊、送槍隊っていうから、なんのことかなと思って聞いてみたら、自衛軍のことを言っていたわけですね。それで家の壁なんかにも大きな字でもってスローガンが書いてありました。銃器を渡して故郷に帰りなさいと、そういうようなことが、石灰でもって。

司会 そういうスローガンは、日本軍は消したんですか(笑)。

戸梶 日本軍は知らん顔をしていましたよ(笑)。日本軍はその当時は、負けるなんていうことは考えておらなかったから、気にもしなかったんです。

質問 通訳として従軍された時に、八路軍との正面衝突に出会われたことはありますか。

戸梶 正規軍とはほとんどないですね。相手はほとんどゲリラです。游撃戦といつてゲリラですね。各部落を単位に少しずつ武装単位がおるわけなんです。それも本当に粗末な鉄砲と手榴弾、それ以外何もないんです。手榴弾が自家製ので、非常に性能が悪かったです。

質問 遭遇したのはもっぱら民兵ということですね。

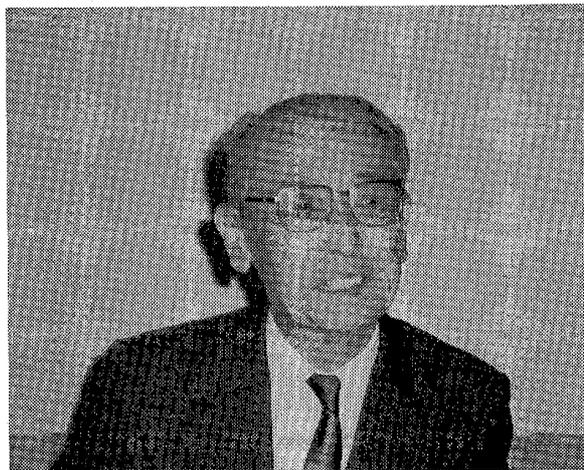
戸梶 ほとんどそうです。ただ、作戦といましてね、各部隊から一個小隊なら一個小隊ずつ集めて、一つの目標を掲げて、ずーっと縮めて行く作戦があります。

それとは別に、もう亡くなりましたけれども、蒋介石軍の于学忠というのが山東省一体に根を張っておりまして、その軍を相手にした作戦にもしゅっちゅう行きました。

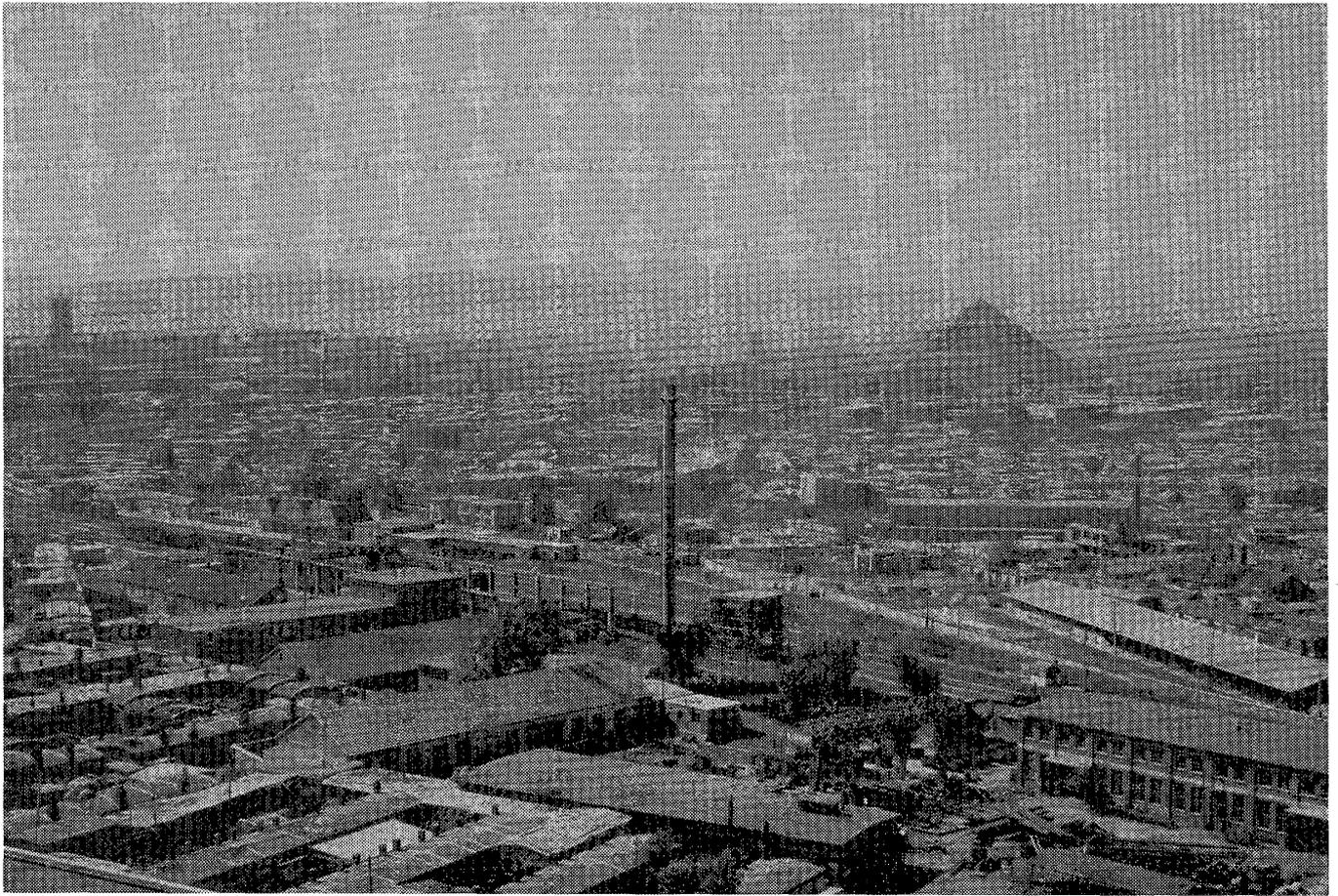
それからもう一つ日本人部隊がありました。投降したのか、それとも捕虜になったのか、よくはわかりませんが、けれども、その人たちが編成した民兵です。

司会 それは戦後じゃなくて?

戸梶 戦争中です。



戸梶 広氏



北 票 市 街 (1986年春)

質問 戦闘部隊なんですか。

戸梶 戦闘部隊です。それは強かったんです。日本軍の作戦のやり方がわかっているもんですから、その裏をかかれてやられて、それで私たちは攻撃に行っただけですけども、今度は全然ぶつからないんです。どこへ行ったかわからなくなっちゃって。何十人単位の部隊なんです。

お父さんのお名前を忘れましたけれども、陸軍中將の息子さんで、見習士官学校だったと思いますが、卒業する少し前に、父親が中將なものですから、部隊長が現地に行つて、やあ飲もうやといつて、一緒に飲んで、帰宮時間に遅れたんです。

それで見習士官から二等兵に降格になつて、とても面目なくて帰れんといふので、汽車が徐行している時に飛び下りて、敵に走つて、それで敵を指揮したらいいんですね。そういう人もおりました。

質問 伊藤院長はまだご健在のようですが。

戸梶 錦州鉄道病院の院長さんの伊藤先生という方は偉い先生で、九十二歳ですが、去年の十二月でしたか、福岡でお会いしたんですけども、元気そのもので、そして現役です。

司会 いまでも開業なさつておられる

んですか。

戸梶 開業じゃないんですけども、福岡県に診療所がありまして、やっぱり福岡県のお医者さんが田舎に行くのを嫌がるらしいんですね。前は毎日行かれたんですけども、いまはお年なものですから、一週間に二回。それも電車で片道一時間半ぐらいかかるんだそうです。やっぱり精神力だか、なんだかと思つて、こっちは七十四歳でもうそれこそどうにもならないような具合ですから(笑)。

司会 いや、戸梶さんも奥様の管理が相当いいということ(笑)。

戸梶 四年前に北京で心筋梗塞でぶつ倒れた時には、これで終わりだと思ひました。それで帰つて虎の門病院に二週間入れていただきまして、あれども、「あんたは心臓病では、まあ死なんだろう」と言っていたかまして、なんとなく安心しております。

司会 それではまだご質問があるかと思ひますが、そろそろ時間も超過しましたので、これにて終了したいと思います。今日はどうも遅くまでありがとうございました。

△文責・中島 洋▽